

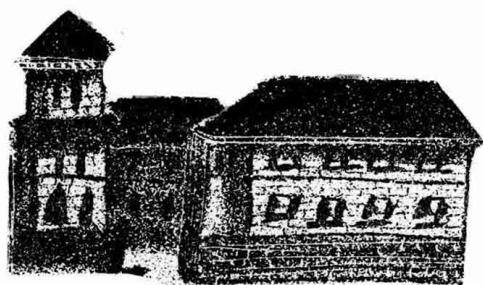
TN君の伝記

なだ いなだ



TN君の伝記

なだいなだ 著
司修 画



福音館書店

著者紹介

なだいなだ 一九二九年東京に生まれる。五三年慶応大学医学部を卒業し、その後作家・精神科医として、人間のころや時代のもたらす病いととりくんで、多面的な活躍をしている。おもな著書は『れとると』『人間、この非人間的なもの』『透明人間街を行く』など。少年少女の本には『おっちょこちよ医』『心の底をのぞいたら』（筑摩書房）があり、岩波新書の『権威と権力』では高校生を相手に、身ぢかなふだん着の対話がかたられている。

司 修（つかさ・おさむ） 一九三六年群馬の前橋市に生まれる。郷里の詩人萩原朔太郎とE・アラン・ポーに親しみ、五六年絵画をこころざして上京。現在は絵画、彫刻、本の装丁、創作絵本など、多彩な分野に独自の個性を発揮している。画集に『ユラージュ』絵本に『はずかしがりやのぞう』（こぐま社）『とんがとびんがのふれぜんと』（福音館書店）『魔女の森』（サンリオ出版）、装丁では大江健三郎『洪水はわが魂に及び』など。



福音館日曜日文庫

TN君の伝記

一九七六年五月三十日初版発行
一九七六年十一月二十日第三刷

著者 なだいなだ

発行 福音館書店

東京都千代田区三崎町一丁目

一番九号 郵便番号一〇一

電話（〇三）二九二三四〇一（代）

振替口座番号東京一一七六四五

本文印刷 明和印刷

表紙印刷 錦印刷

製本 積信堂

NDC289／四〇〇ページ／一九センチ

乱丁落丁はお取替えいたします

©1976 Nada Inada

目

次





TN君の伝記

第一章	少年時代……	3
第二章	青年時代の(1)	高知から長崎へ……24
第三章	青年時代の(2)	江戸で……52
第四章	青年時代の(3)	ヨーロッパで……65

第五章	青年時代の(4)	フランスで……………	93
第六章	青年時代の(5)	日本に帰る……………	116
第七章	自由をもとめる人たち……………	140	
第八章	抵抗 ていこう のなかで	(1)……………	159
第九章	抵抗 ていこう のなかで	(2)……………	183
第十章	ふまれる麦のように……………	204	
第十一章	東洋自由新聞をだす……………	225	
第十二章	十年先の約束 やくそく ……………	248	
第十三章	自由のために流される血……………	266	
第十四章	まだ、あきらめない……………	290	
第十五章	最初の国会……………	315	
第十六章	TN君、いづくにある……………	336	
第十七章	いやな感じ……………	358	
あとがき……………		379	

TN君の伝記

第一章 少年時代

1

ここに一人の人間がいる。TN氏^し、TN先生、いろいろ考えたすえに、彼をTN君と親しみをこめてよぶことにする。ぼくは、これから、そのTN君の伝記を書こうと思うのだ。伝記を書くなら、どうして、本名を出さないのか、君は疑問に感じるかもしれない。

だが、答は簡単だ^{かんたん}。ぼくの知ってもらいたいのは、彼の名前ではなくて、彼がどんなふうに生きたか、ということだからだ。そのためには、名前なんてじやまになる。そう思ったから、名前を出さない。名前というのは不思議なものさ。なんべんも名前を聞いて、顔をおぼえると、それ

で、その人間のこと、よくわかったような気がしてしまう。

たとえば、いまの総理大臣を、君はよく知っているような気がするだろう。だけど、彼が戦争中はどんなことをしていたか、どんなことをいつていたか、知っているだろうか。戦後、どのようなことをしてきたのか、知っているだろうか。そう考えてみると、自分の国の政治をあずけている人間のことを、意外と知っていないことに気がつくだろう。ぼくたちは、名前と顔を知れば、なんとなく、その人間をよく知っていると思うてしまう。こうして政治家たちは、選挙のために顔写真のポスターをはり、名前だけを、こわれたレコードのように、くりかえすのだ。ぼくが、名前がじゃまだという意味が、わかっただろうか。

だから、君は名前なんか知ろうとせず、ある一人の日本人が、ある時代をどんなふうに生きたか、ただ、それだけを知ろうとしてほしい。そして、できれば、TN君という人間の目を通して、歴史の本を通して見るように、歴史のこちら側からでなく、向こう側から、彼の生きていた時代を見ようとしてもらいたい。

さて、まず、TN君の生きていた時代のことを、君たちに、おおづかみにつかんでもらおうと思ふ。TN君は、一八四七年に生まれて、一九〇一年に死んだ。こう書けば、彼が、十九世紀の、ほぼあと半分の五十年間を生きていたことがわかるだろう。日本の年号になれすぎていて、どうもぴんとこないという人には、明治元年、明治維新とよばれる革命のころ、TN君が二十歳になるか、ならぬかだったということを、つけくわえておこう。

この五十年間は、ながい歴史をもった人類が、大きく生き方を変えた、まがりかどのような時代だ。いまの、ぼくたちの生きているこの時代の、いいところも、悪いところも、この時代にその大部分の根があるといってもよいだろう。たとえば、自分のまわりを見まわしてみたまえ。電車や汽車を使って、通学したり、旅行したりするだろう。ストのときには、なければ不便さを感じて感じる鉄道だが、大都市のあいだに、客をのせて走る列車が走りはじめたのが、このころなのだ。自動車。便利ではあるが、公害という厄介な問題もかかえている乗物。このガソリンで走る自動車が發明されたのも、この時代だ。無線電信や電話が、發明されたと思ったら、すぐに生活に入りこみはじめたのが、おなじくこの時代。飛行機はどうだろう。飛行機が、はじめて人間をのせて空を飛んだのは一九〇三年のことだが、計画され、つくられはじめたのは、やはりこの時代だ。医学の分野では、つぎつぎと伝染病の原因のバイ菌が発見されていた。注射器のつ

くられたのも、このころだ。こう書けば、わかりのいい君だから、文明生活とよんでいる暮らし
かたがはじまったのがT N君の時代だったことが、わかるはずだ。

この点は、すぐにもわかるだろうが、ほかの意味でも、人類はまがりかどにあったのだ。たと
えば、いま、地球の半分が、社会主義国でおおわれている。そうでない国にも、社会主義の政党
がある。ところで、この社会主義に、大きな影響をあたえたマルクスの『共産党宣言』は、いつ
出たか。T N君の生まれたつぎの年だ。そして、マルクスの『資本論』という本の第一巻が出た
のは、その十年後だ。そのころ生きていた人たちで『共産党宣言』や『資本論』が出されたのを
知っていた人は、どれくらいいただろうか。知っていた人でも、はたして百年後の世界に、それ
らがこんなに大きな影響をあたえるものだと、想像できただろうか。おそらく、できなかっただ
ろう、と思う。

そのほかに、いろいろある。一八六一年にはアメリカで南北戦争がはじまり、それから四年
間、アメリカ人は国内で血を流しつづけた。一八七一年には、当時プロシャとよばれていたドイ
ツと戦争をしたフランスが負け、パリ・コμμニューンとよばれる事件がおこった。小さな事件の
ように見えるが、こうした事件のどれもこれもが、いまの世界のすみずみにまで、大きな影響を
あたえつづけている。

TN君は、そうした事件じけんのおこる時代じだいに生きていたのだ。

3

さて、時代が、おおづかみにできたから、つぎは場所や家だ。彼は、どこで生まれたのだろう。当時世界のはずれだった日本でだ。つまり、彼は日本人である。その日本のどこで生まれたのだろう。日本のはずれの土佐でだ。土佐、現在の高知県である。TN君はいまの高知市で生まれた。土佐は、当時、日本の南のはずれだった。四国という島の南側にあり、三方の高い山と海にかこまれた土佐は、四国という島のなかの、そのまた島のような、日本のはずれだった。江戸に幕府があり、社会や政治の中心は、はるか遠くにあった。文化や商業の西の中心が、京都と大阪にあったが、海や山にさえぎられて、じっさいの距離よりも、気持のなかではずっとはなれていた。四国の南にある土佐は、いまでも、すこし雨が降れば、山を越す鉄道や道路は、土砂くずれで通れなくなる。だから、陸の孤島などとよばれるくらいだ。それで、世の中の動きや変化に、いつもとりのこされがちだった。世の中のしくみも、人のこころも、古いものが、古いままで残っている土地、それが土佐だったのだ。この土地に大名として山内家が戦国時代に入ってきて、TN

君が生まれるまで、二百五十年ばかりの月日が流れていた。そう、その土佐で、TN君は生まれたのだ。ではどんな身分の家に。足軽あしがらの家に。さあ、またまた、君が知らねばならないことが出てきた。足軽とはなんだろう。足軽の家に生まれるということは、どういうことだったのだろう。足軽というのは、いちばん身分の低いさむらいのこと、というぐらひは、君も知っているだろう。それに、TN君の生まれた時代には、士農工商の四つの階級があったことも。では、足軽は士なのであろうか。いくら身分が低くても、士は士だろう。そう思うかもしれない。たしかに農でも工・商でもない。でも、一人前のさむらいとは、見なされていなかった。中途半端ちゆうはんぱ、そう、ひじょうに中途半端な士だった。たとえば、士は姓せいをもち、刀を二本差して歩くことを、特権としていた。そのことも知っているだろう。しかし、足軽は、とくに、許されたもののしか、姓をもてなかったのだ。明治維新いしんのあと、戸籍こせきがつくられたとき、昔のさむらいは、戸籍に士族と書かれ、平民と区別くべつされた。足軽は、そのときも士族にいれられなかった。足軽だけは卒族そつぞくと書きこまれ、しばらくすると、大部分は平民に格下げされてしまった。自分では、さむらいだという自尊心じそんしんをもっている、さむらいが、足軽を自分たちより一等低い身分のものとなし、見なしていたのだ。なかまから軽べつ的に見られるのだから、さむらいでないものからも、軽べつされるのも当然だ。足軽が、どんな気持で生活していたか、想像そうぞうできるだろう。

すこし横道にそれるが、足輕の歴史について語っておこう。足輕という名前は、南北朝前後から、ちらほら本などに見かけることが出来る。雑兵ぞうひやうという名前ではばれることもある。ま、戦場をかけまわる歩兵ほへいだと思えばいいだろう。足輕があらわれたのは、戦争のやりかたの変化に関係していた。源平時代は、騎兵きへいがおもで、平地での合戦が多かった。大将たいしやうどうしの一騎打ちが、戦争の中心だった。ところが南北朝時代から、山城やましろにこもってたたかうことが多くなった。当然のこと、歩兵ほへいがそういう戦争ひやうせんに必要なになる。そこで、農民がかきあつめられ、雑兵ぞうひやうとか足輕とかいう名前ではばれる臨時りんじの兵隊へいたいになったのだ。足で戦場を走りまわる連中という、ちよつと輕べつをこめられたかたちで、足輕とあだなされた。ところが、戦国時代になると、戦争の主役は足輕隊に変わった。日ごろから訓練くんれんした足輕の集団しゅうだんに、鉄砲てつぽうとか槍やりをもたせ、さまざまな隊形をとらせて、たたかわせる。もう一騎打ちの時代でなくなったのだ。こうなると、臨時りんじの寄せあつめの農民ではだめだ。それを職業しよくぎやうとして、日ごろから訓練くんれんにはげんでいなければ役に立たない。そこで、大名は直接に給料きやうりやうをはらって、足輕をめしかかえはじめた。織田信長おだのぶながが、日本を征服せいふくしたのは、彼かれの、じゆうぶんに訓練くんれんされた足輕の鉄砲隊てつぽうたいのおかげだった。

さて、徳川時代とくがわに入ると、平和がつづき、もう戦争らしい戦争がない。それでも大名たちは、足輕をかかえつづけた。もちろん、数は大分へらしたが。戦争のときは主役だったが、戦争がな

くなると、足輕は無用の長物だ。輕べつされ、じゃまにされるようになって、べつに不思議なことはない。だいたい、十万石の大名は、三百人の足輕をやとていたというから、二十四万石の土佐藩には、およそ七百名ほどの足輕がいたのだろう。では、足輕は、どれくらいの給料をもらっていたのだろう。そのころは、米をもらったのだが、基本給の平均は、米十二俵分、つまり約五石だった。それが一年分の給料。江戸づとめは、一石の出張手当がつく。役をあたえられると、一石の半分くらいの手当がもらえる。当時、一人の大人は、年に一石の米を食べていた。家族が食べて、あまった米を売って金にかえ、それで必要なものを買わなければならないのだから、考えても、かなり苦しい生活だったことがわかるだろう。

TN君は、そういう足輕の家に生まれたのである。だれだって、こんな不安定で、苦しい生活をしているものは、もっと安定した楽な生活をしたと思う。自尊心が、こんな輕べつされた身分で、いつまでもいたくない、と思わせる。足輕は、そもそもが兵隊だから、戦争のときに手柄を立てれば出世ができる。そのときを待ちながら、熱心に、日ごろから武術の練習にはげむものも多かった。槍や劍の腕をみがいた。しかし、平和はながくつづいたから、足輕が足輕でなくなる機会は、いつまで待ってもこなかった。役人としてみとめられるために、学問に精を出すもの

も多かった。しかし、それとて、たかが知れている。だれもが大学者になれるわけではない。そして、よほどの大学者にでもならなければ、学問で出世するのはおぼつかなかった。

TN君の十歳ほど年上の福沢諭吉は、徳川の封建制の時代やりきれなさを、こんなふうに説明している。

「それは、ひきだしのたくさんある、たんすのような世の中だ。人間は、そのひきだしごとに、きちんと身分で区別されて整理されている。いくら、たんすをゆすってみても、上のひきだしの中のものと、下のひきだしのものとは、いつまでたつたって、まじりあうことはない。そういう、きちんとした秩序に世の中がかためられていた。家老の家に生まれたものは、苦労しないでも大きくなれば家老になり、足輕はどんなに努力しても足輕だ。別のものになる自由がない」

TN君は、こうして代々足輕になることがきまった家に生まれたのだ。

4

当時の高知の人口は一万五千人くらいだった。二百年ばかりのあいだ、べつにふえもせず、へりもせずつづいていた。いまの国鉄の高知駅からほど遠くないところに、TN君の生まれた家の